

# 南京日本商工会議所，市来義道と「姜魏堂」

——『南京』（南京日本商工会議所，昭和16年9月）解題——

金丸裕一

## I. 南京日本商工会議所と『南京』

市来義道編『南京』（南京日本商工会議所，1941年9月）は、管見の限りにおいて、日本語によってまとめられた初めての本格的南京指南書である。さらに、史料形成の過程が比較的克明に追えるという点で、こんにち「歴史学研究」に取り組むわたくしたちが、この二次史料をどのように利用したら良いのかといった方面に対しても、大きな示唆を与えてくれる。本稿では、これらの事柄を意識しながら、簡単に『南京』の内容を解説した後、編者の市来義道について分析したいと思う。

同書が扱う領域は、実に多岐に及ぶ。すなわち、地理・歴史・交通・政治・経済・外交・居留民・雑録に分けられた各篇に加え、「旅行案内」と「南京日本商工会議所」という略史までが附録されている。殊に各篇の部分は、「事変前」と「事変後」との時期区分の下、概ね1940年に至る多種多様な素材が掲載されており、戦時期南京の状況を調べる際、簡明ながらも有用な情報を提供してくれる。

本文のみで688頁を数える大部の図書であるにも関わらず、その編集は短期間に進められた。編者みずからが表明する通り、「三ヶ月にも充たぬ短い刊行期限に追はれて、中にも牧山勲（中国側資料）、今藤曾二（日本側資料）両君の献身的努力」があったものの〔1941年3月段階〕、その後「日本側の資料蒐集に当つてゐた今藤君は他へ転出、中国側資料の蒐集並に翻訳に当つてゐた牧山君は過労の為病臥入院し遂には休職となつて一次帰国」〔1941年7月〕という状況となり、市来が「輻輳する雑務の傍ら編纂」したという、驚異的とでもいべき作業だった<sup>1)</sup>。

どうしてかくも短期間に編纂が急がれたのか？ そこには二つの背景が存在していたのではなからうか。

第一は、いわゆる「支那事変」後のブームにより、南京へと定着する日本人が爆発的に増加した事実に求められよう。南京在留邦人数を表1に整理してみた。加之、表1には現れないが、南京に駐屯する軍人人口を鑑みると、「便利」な案内書が求められていた背景は推測するに難くない。

第二に、発行主体である南京日本商工会議所側の事情も存在していたと史料される。同会議所自体は、1939年10月29日に、150名の会員を擁して成立していた。「時期尚早」との声もあった<sup>2)</sup>というが、前述の在留邦人増加が商工会議所設置を後押ししたのであろう。

表1 在南京日本総領事館管内邦人人口数

(単位：人)

年月	内訳	内地人	朝鮮人	台湾人	合計	頁
1934. 6		125	95	32	252	P. 12
1934. 9		128	288	32	449	P. 12
1935. 4		129	198	33	370	P. 21
1937. 1		147	243	38	428	P. 22
1937. 4		144	243	38	425	P. 23
1937. 7		163	243	38	444	P. 22
1937. 10		不明	不明	不明	不明	P. 21
1940. 1		9,981	1,006	386	11,373	P. 2
1941. 1		15,654	2,506	659	18,819	P. 2
1941. 4		15,746	2,283	732	18,761	P. 2
1941. 7		17,041	2,214	883	20,138	P. 2
1941. 10		17,964	1,942	849	20,755	P. 2
1942. 1		18,838	2,080	938	21,856	P. 2
1942. 7		20,585	1,715	1,037	23,337	P. 2
1942. 10		20,716	1,653	1,103	23,472	P. 2
1943. 1		21,074	1,647	1,152	23,873	P. 2
1943. 4		21,715	1,809	1,300	24,824	P. 2
1943. 7		18,966	833	1,362	21,161	P. 2
1943. 10		19,300	941	1,401	21,642	P. 2
1944. 1		19,868	993	1,448	22,309	P. 2
1944. 4		19,110	948	1,343	21,401	P. 2
1944. 7		19,472	1,089	1,389	21,950	P. 2

(出典) ①1934. 6～1937. 10『満洲国及中華民國在留本邦人口概計表』外務省東亞局第二課編。

②1940. 1～1942. 7『中華民國在留本邦人及第三国人口概計表』外務省東亞局第三課編。

③1942. 10～1944. 4『同上』大東亜省総務局調査課編。

④1944. 7『同上』大東亜省総務局経済課編。

(補足) 西島五一によれば、「空白期間」たる1939年初春の人口は5,000人位であったという(『南京』『序』の1頁)。

表2 南京日本商工会議所会員の本社(本店)所在地(1941年4月1日現在)

単位：社(店)

中 国	南京	上海	漢口	大連	青島	済南	北京			計
	100	49	5	2	1	1	1			159
日 本	東京	大阪	横浜	神戸	名古屋	京都	福岡	長崎	高知	計
	16	13	3	2	2	1	1	1	1	40
帝国圈内	台北	台中	奉天							計
	2	1	1							4
合計										203社

(出典)『南京』附録(二)9～22頁より筆者作成。

しかし表1で確認した通り，在南京邦人発展史は「事変」後の特殊な現象であり，表2に整理した1941年4月1日時点における会員会社(商店)の本社(本店)所在地から見ても，南京を拠点に活動した中小企業・商店などが過半を占めていた。比較的規模が大きな企業体として数えられるものは，東京に本社を持つ三井物産・三菱商事や東亜海運・日本通運，また横浜正金銀行出

表3 南京日本商工会議所職員等異動表（1941年6月まで）

入所日	職名	氏名	退職日
1939. 10. 29	書記	岸野 萬治郎	1940. 8. 24
同日	傭員	邵 宏 才	1940. 5. 11
1939. 12. 4	書記長	市来 義道	
同日	雇員	古川 美津子	1939. 12. 20
1939. 12. 8	傭員	何 大 鵬	
1939. 12. 11	雇員	馬 正 鈞	
1939. 12. 20	雇員	山口 信子	1940. 5. 11
1940. 2. 20	嘱託	孔 繁 祺	
1940. 3. 1	書記	大野 宗治郎	1941. 3. 17
1940. 5. 8	書記	川添 活夫	
1940. 6. 20	傭員	范 桂 珍	
1940. 7. 4	雇員	池上 京子	
1940. 8. 7	雇員	黄 菊 仙	
1940. 8. 26	書記補	中本 為二郎	1941. 5. 8
1940. 9. 25	雇員	張 甲 榮	
1940. 10. 4	書記補	今藤 西二	1941. 4. 8
1940. 11. 1	書記	牧山 勲	
1941. 3. 1	臨時	前田 益弘	1941. 5. 31
1941. 4. 11	書記補	加藤 重雄	

（出典）『南京』附録（二）8～9頁より筆者作成。

張所や台湾銀行派遣員事務所，更に何れも上海に本社を置く国策会社たる華中鉱業・華中水電・上海内河輪船・華中鉄道・華中電気通信・華中蚕糸の各社南京支店くらいのものであろう。南京日本商工会議所に所属する会員の業種別百分比を附図に整理したが，これは各会員の零細性を雄弁に語る。

この点については，更に調査を進めてみた。

まず、『会社四季報』の朝鮮・満洲・中国版ともいうべき，東洋経済新報社編『大陸会社便覧』昭和16年版・同17年版・同18年版（東洋経済新報社京城支局，1940年・1941年・1942年）は，資本金100万円以上の企業を中心に編纂された会社案内であるが，これに収録される企業・商店は，南京においては確認できなかった。

また，中西利八編『満華職員録』（満蒙資料協会，1941年）は，満洲国と中華民国に所在した日本資本企業や団体を中心とする名簿である。これに収録されるものと，南京日本商工会議所の会員との対比作業を行った結果を，附表として提示する。これまた重複はきわめて少ない。

したがって南京日本商工会議所の事務体制及び財政的基盤は，余りしっかりとした力量を持っていなかった。記載された住所などから推測するに，事業所の多くは，南京戦終了後，中国側から接収したものが大半であったと思料される。

編者の市来義道は，戦後に筆名で発表した回想の中で，「一九三九年の暮れに創立されたばかりの南京日本商工会議所には，私と，中国人の集金人と小孩子（シャオハイツ，子供のこと，ここではボーイ）のたった三人きり」<sup>3)</sup>だった組織が，徐々に拡大していく状況を，全て仮名で描いている。ただこれには誤り（創作か記憶違いかは不明）もある。『南京』刊行の時点における職員

や雇員の構成は表3の通りであり、短期間しか在籍しなかったメンバーが多く存在していることが、初期の組織的不安定を強く示唆するのである。

以上を要するに、「事変」後における異常なまでの日本人激増が、『南京』をはじめとする南京日本商工会議所刊行物<sup>4)</sup>の産みの親といえるだろう。

## II. 史料の個性

前述した『南京』編纂の経緯、及び南京日本商工会議所の陣容を鑑みると、この指南書編集に向けた本格的調査活動を実施することは略々不可能であった。

この点について市来は、①『所報』の内容があまりに貧弱であり、②それを南京日本総領事館の「吉野」領事（恐らくは吉武貞治領事の仮名……筆者の推測）に詰問され態勢上の不備を返答したところ、③領事館経済課の資料援用を勧められた、と振り返る<sup>5)</sup>。

『南京』の序文には、「諸般の資料が日本側に乏しく、多くは中国側のそれに依拠した為、現在に於ける当事務局の手に余つた<sup>6)</sup>」、と明記されているが、これは概ね事実ほど近い表明であろう。

すなわち「事変前」の各種データや定性分析については、主として南京国民政府や南京市政府の諸機関が実施した調査を日本語訳した内容が大半である。「ヤング・チャイナ」国府の首都としての必要上、これらは遂行されるべくしてなされた活動であり、従前の調査と比較して信頼度が飛躍的に向上している事は、良く知られている。同時に「満洲事変」以降は緊張感が微妙な温度差こそあれ常に継続していたので、日本側が実地調査に参入することは困難であった。かかる現象は、戦時期の興亜院傘下にあった「中支建設資料整備委員会」が、机上翻訳調査をもって戦前期中国の各種到達度検証を試みた事例<sup>7)</sup>に通底している。

ところがこれは、「事変後」になると一変する。国府が武漢を経由して重慶に疎開するという史的コンテキストの中で、「テキスト」自体の作成主体が一旦は壊滅、そして親日的勢力による調査活動「再建」へと、事態がめまぐるしく展開したからであった。

『南京』に資料を提供したと判断される主要な機関名を、以下に列举しておこう。

督辦南京市政公署秘書處・同振務委員會・南京特別市政府秘書處・同工務局・同社会局・社会運動指導委員會南京分会・南京市政府・南京市地政局・南京市商会・同整理委員會・南京市職工会總會・揚子華工總工會・自治区公署・警察庁・南京電話局・南京市内日本人各種同業組合・中支那振興株式会社南京事務所・華中鋁業株式会社南京出張所・華中水電株式会社南京支店・上海内河輪船株式会社南京支店・華中電気通信株式会社南京營業所・華中都市公共汽車株式会社南京營業所・華中鉄道株式会社南京支社・華中水産株式会社南京出張所・華中蚕糸株式会社南京支店・淮南煤礦株式会社南京出張所・中華輪船株式会社南京辦事處・中華航空株式会社南京支社・永禮化学浦口工業所南京出張所・東亜海運株式会社・横浜正金銀行・漢口銀行・上海銀行・台湾銀行・在南京日本総領事館・南京特務機關・南京日本居留民団・帝国在郷軍人会南京分会。

要するに、南京日本商工会議所に勤務する中国人職員が行った各業種の「事変後」経営状況・慣習に関する実地調査を例外<sup>8)</sup>に、大部分が提供された情報、あるいは新聞や雑誌・公報類から抽

出したデータによって構成される「没個性」性こそが、『南京』の「個性」なのであった。

したがって、それらの「整理方法」、別言すれば編集者たる市来義道による史料的素材の取捨選択の中にこそ、二次史料たる『南京』の「価値」が投影されるのである。

### Ⅲ. 市来義道と「姜魏堂」

それでは、いったい市来義道とは何者なのか？ 以下、史料形成者の探究へと話題を転換してみよう。

南京日本商工会議所への就職動機について、戦後に市来自身は次のように振り返る。勤務していた「時事新報壊滅後の失職中で」あり、「神田区役所（今は千代田区役所となり、場所も違う）の臨時雇となって戸籍の謄写をやり、日給一円二十銭を貰っていた私を大陸に呼んでくれたのは、慶應義塾普通部での同じ転校生同志の交際が今日まで続いている国策新聞＝大陸新報の、南京支社編集長」であった、と。<sup>9)</sup>

ところが大陸新報の西島五一（前記した通り、市来の回想では「東田」と名乗られる）はこれに対して、「事実上会議所の事務を運行する書記長には慶應義塾経済学部卒業後大朝、時事等を経て当時内閣情報部所属の某機関に理事として納まつてゐた市来義道君を自分が推薦した」と証言する。<sup>10)</sup>

敗戦を挟んで、多くの人々が身の処し方を節操なく転換させ、軍国主義者から共産主義者へ、あるいは民主主義者やキリスト者などに「転向」した事例を、わたくし自身も数多くの史料から発見し、また戦時青年だった父親からも語り聞かされてきた。

「わたくしが住んでいた戸数百戸ばかりの雪国の寒村にも、この前後に赤旗を立て、天皇制打倒、大地主打倒を叫ぶ人が突如出てきて、村人たちをびっくりさせた。彼は戦争中は鬼畜米英の旗振りを先頭になってやっていた人であった」という、筆者の父親よりも二歳若い歴史作家・半藤一利の淡々とした記述は、人間性の脆弱さを見事に描写していると、世代を超えたシンパシーを抱く。

やや余談的挿入が長くなってしまったが、本稿執筆を進めている過程において、筆者が市来義道に対して、ある種「転向者」としての節操への疑念を抱きながら、史料と格闘していた事実を、次に紹介したいと考える。

\* \* \*

驚いたことに市来義道は、戦後は戯曲作家としての生き方で知られた人物なのであった。国立国会図書館図書部編『国立国会図書館著者名典拠録 明治以降日本人名 第二版』（紀伊國屋書店、1990年）第二分冊には、「キョウ、ギドウ 姜魏堂 1901年生 劇作家『生きている虜囚』 本名：市来義道」（2303頁）とあり、『著作権台帳 文化人名録 第26版本冊』（日本著作権協議会、2001年）には、生年月日、出身地、学歴に加え、『ある帰化朝鮮人の記録』と『神を恐れぬ人々』といった代表作、更に京都市中京区内の住所と電話番号までが記載されている（82頁）。

更に市来の劇作家としての仕事については、在日朝鮮（韓国）人文学研究者の林浩治が運営するホームページのなかで、おおまかな紹介が行われていた。すなわち、以下の通りである。

姜魏堂（かんぎどう）1901年、鹿児島県生まれ、91年死去。豊臣秀吉の朝鮮侵略のとき拉致されてきた陶工を先祖に持つ「日本人」として、『生きている虜囚』（66年・新興書房 表題作の他に「壺屋の高麗人」「古里に花は咲けども」収録）『秘匿・薩摩の壺屋』（79年 晴文社）などを残した。代表作の「生きている虜囚」は、司馬遼太郎の有名な作品「故郷忘じがたく候」と同じ題材を扱う。しかし、作風は対照的。司馬の作品が望郷の叙情を基調にしているのに対し、「生きている虜囚」には四世紀におよぶ人びとの辛酸と屈辱の生活史、それに思いをよせる作者の民族的な情念が直截に表出されている<sup>12)</sup>。

「民族的な情念」といえば、姜魏堂『生きている虜囚』（新興書房、1966年）の扉には、父の次弟が名義上の養子縁組により姜姓を捨てた事実を示す戸籍抄本の写真が掲載され（図1参照）、その裏面では父親・姜義篤の四男一女の末っ子であった「姜魏堂」を、次弟の養子として役場に届出、二年後に母方の実家の養子にするという複雑な手続きで、改姓していた母方の姓を名乗らせた経過が、こと細かに記されている事も紹介しなければなるまい。

市来の父親である姜義篤は、1853（嘉永6）年に薩摩國日置郡下伊集院村で出生、「医師ナレトモ仍ホ政治思想ニ富ミ自由改進ノ主義ヲ採リテ現ニ鹿児島同志会理事ナリ……公共ノ事ニ志篤ク又地方ニ人望アリテ教育会医師会等毎ネニ会長ニ推挙セラル」といった地方名望家であった<sup>13)</sup>。市来が小学生時代に死別したという父は、鹿児島県議会副議長を勤め鹿児島県医師会会長に推薦された。市来は父親を、その「苦学力行」ではなく、「一字の姓を改めず、無宗教とともに遂に生涯それを守り通した」故に尊敬すると述懐している。そして自らをも、「虜囚の後裔」と規定したのであった<sup>14)</sup>。

1872年2月の戸籍法（壬申戸籍）施行以降、文禄・慶長の役を契機に日本に連行された朝鮮人末裔が日本式の姓に改める中、子供達には日本姓を強引な手段で与えたものの、自らは「姜」姓を固守した父親と祖先への記念から、市来は「姜」姓を名乗り、「義道（ギドウ）」と同音の「魏堂（ギドウ）」をペンネームとしたのである。戦後の姜魏堂が、日本国籍を有しながらも朝鮮総連系の団体と密接な関係を維持しながら活動したルーツも、ここに起因していると考えたい。

\* \* \*

名は単なる記号ではない。名に本質が顕現される。例えば洗礼名は、その人物のクリスチャニティが積極的に主張された名である。漢字姓からその人物の出自までもが類推されてしまうような場合、いったいどの時点から市来が「姜」姓を用いていたかという問題の探究は、彼の「朝鮮」への自己同一化の起点を確定する意味においても、まさに鍵となる作業である。

1946年に第一回讀賣演劇文化賞を受賞した出世作「神を恐れぬ人々」の台本が、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館に保管されていた（図2を参照）。ガリ版刷の厚い台本を丁寧にくめくって行くと、「広島県安佐郡古市町東野八十八 市来方気付 姜魏堂」という当時の住所とともに、略歴として「父母共に朝鮮人、鹿児島県下に生る。慶大経済学部卒業後十年に近い記者生活を経て渡支、南京・上海等で六年を過す。当年四十六歳の『文学浪人』。作劇茲に二十年」と、「一九四六年の春」付で記されている<sup>15)</sup>。

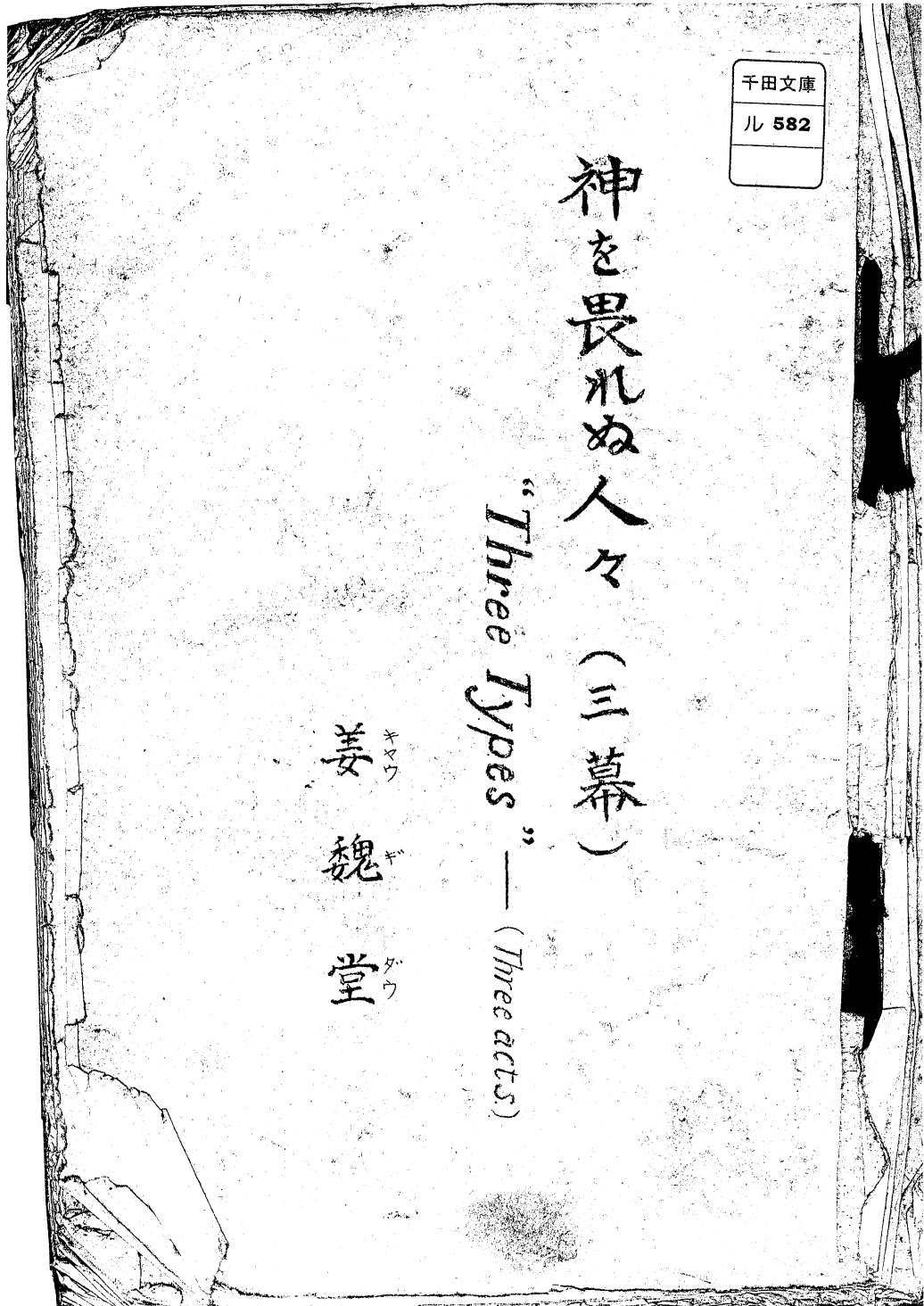
上海における市来義道（=姜魏堂）の国策会社系機械工場勤務期間の経験から創作した同作品が活字化されるのは、1968年9月を待たねばならず<sup>16)</sup>、台本と活字本を対比して閲覧しても、登場人物の年齢が若干異なっていたり、あるいは元々の「日鮮の混血児」といった表現が「日朝の混

図1 姜家の戸籍関係資料

鹿兒島縣日置郡下伊集院村 苗 陸奥 武松九番戸 平民		戸主 前主 父 姜 玄 矢	
明治六年四月十日相續 在元無據是月或前可也時死今月四日原合自戻附 在元無據是月或前可也時死今月四日原合自戻附 在元無據是月或前可也時死今月四日原合自戻附		父玄矢長男 姜 義 篤 重和永 六年十月十日生	
明治八年四月十日相續 在元無據是月或前可也時死今月四日原合自戻附 在元無據是月或前可也時死今月四日原合自戻附		妻 萬 延 元 年二月廿八日生 玄 矢 三 男	
明治七年九月廿九日慶島縣日置郡下伊集院村苗 陸奥 武松九番戸		妻 玄 久 年 月 日生	
右抄本、除籍原本、相違ナキト認證ス 大正十一年六月十九日 日置郡下伊集院村長 郡山 屋 三 助		日置附 在元無據是月或前可也時死今月四日原合自戻附 在元無據是月或前可也時死今月四日原合自戻附	

(出典)『生きる虜囚』に収録。

図2 「神を畏れぬ人々」の台本



(出典) 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館千田文庫所蔵。



図3 戦前における「姜魏堂」の作品



# つばや盛衰記

姜 魏 堂

序 曲

舞臺一面の砂丘。背景の海の彼方に鳥影。明方。荒い波濤の響き。何處からともなく、哀調を帯びた朝鮮の音楽が傳はつて来る。聴て、汚れた朝鮮服を纏つた子供達が、上手から駆けて出る。(序曲と第一幕に於いては朝鮮服の登場人物相互間の會話は朝鮮語に據るものと想像され度し)

子供達 (下手の、一番高い砂丘に駆け上つて叫ぶ) 見える見えるー今朝はよう見えるぞう。(上手に向つて招き乍ら) 早う来おい。(鳥影を指し乍ら) 雲が無いで、よう見えるぞお。

上手から、同じく朝鮮服を着た男や女が多勢登場。子供達は駆け寄つて、老人達の手を挽いて行く。一同、黙然として砂丘に登り、遠く海の彼方を望み見る。そして、最初は女達次いで老人達、最後には子供達や壯年者達に至るまで、その場に蹲る。女や子供は哀號の叫びを挙げ、男達の中にも噓泣する者がある。然し、白髪長髯の一老人と、筋骨逞ましい四十歳前後の男、この二人だけは立つた儘で、黙然として鳥影を眺めてゐる。遠く、千鳥の啼聲。聴て下手から、日本人の漁師が二人出て来る。

漁師A (指し乍ら) またあすこで泣いてくさるだ。

## 劇界消息

(東京)

◇中央演劇協會 七月十日夜 市政講堂

高橋文雄作「秋風が聴いた四つ」の話し四景 (演出王野東於その他、装置與岡折一) 高橋文雄作「死なす」十三景 (演出石坂勝久、装置秋元政太郎)

◇東京童話劇協會 第十九回公演 七月十五日晝夜 仁壽講堂

宮津博作「アリ・ババと四十人の盜賊」(演出青沼三郎、装置芝田圭一) 川崎三奇夫作「踏切番の家」一幕 (演出生駒洋一、装置多田温)

◇東京少年劇團 夏季出張公演 十四日より廿三日まで 多摩川園「人形」「そら豆の煮えるまで」「ぼんち繪」「學生三人男」

◇劇團傀儡座 十六日夜 市政講堂  
作田忠禱作「悲觀する勿れ」類田六福作「白野辨十郎」(金光院の場) 逆井仁作「南無武士道」

◇門人座 第四回公演 廿七日夜 飛行館  
上野一雄作「要保護少年」一幕 瀬戸英一作「わくら葉」一幕、瀬戸英一作「つゆ空」一幕、水

(出典)『テアトロ』第4号(昭和9年8月号)より。

図4 秋田雨雀のコメント

## 編輯後記

○ 今月號ではプロットの解散と新劇合同に關する記事を前面に押し出すことにした。新劇合同の問題は、日本新劇の新發展に對して重大な意義をもつてゐるもので、初めはこの運動に關して、賛否兩論が出たので、或は對立的な關係を生じほしくないかと心配したが、間もなく、双方よく理解しあひ、意見の歩み寄りを生じて、大勢が合同論に傾いて來たことは本號の記事でもよく理解される。

○ 創作欄の貧弱なのは、何んといつても、「テアトロ」の缺點だ。今月は姜魏堂君の「つぼや盛衰記」を掲げることにした。この戯曲は陶器の製作に關する日鮮關係の事實を取扱つたものであるが、その觀點は民族主義的であり、藝術的にも幼稚な點もあるが、材料の珍しい點で採用することにした。

○ 「海の彼方」欄は、今月はフランスと英國の記事を掲げることは出来なかつた。隨筆欄は豊富ではないが岡本文彌君の蘭蝶亭雜信は一つの問題を私達に提供してゐる。劇評は益々豊富になつて行くが、戯曲評の貧弱なはいけない。「テアトロ」はこれを一つの使命としなければならぬ。  
(秋田)

(出典)『テアトロ』第4号、64頁。

血児」に改められているといった以外、内容に關する修正が行われた形跡は確認できなかった。

そして以後、寡作ではあるが演劇専門雑誌『テアトロ』に、「己を語る」（第74号、1946年12月）、「古里に花は咲けども」（第83号、1948年1月）、「素人作家よ自信を持って」（第91号、1948年12月）などの文章が掲載されるのである。既に脚註で紹介した何冊かの著書も、全て戦後の出版であることは、繰り返すまでもなからう。

戦時期の南京日本商工会議所への入所前に市来が「失業中」であったのか、あるいは「内閣情報部所属の某機関理事」であったのかは、残念ながらもまだ調査が進んでいない。だが仮に後者であり、戦前・戦時期は専ら「市来義道」という氏名を用いて活躍していたのであったとすれば、彼は敗戦を挟んで「名」を変えることにより、戦時期の罪という「実」から逃亡せんとした憶測すら許されるだろう。

\* \*

結論から述べれば、市来義道は戦前の段階から「姜魏堂」を名乗っていた。すなわち、秋田雨雀・岸田國士・千田是也・中野重治・神近市子などを代表的な寄稿者としていた『テアトロ』第4号（1934年8月）に、「姜魏堂」名義を以て「戯曲 つぼや盛衰記」を投稿、活字化されていたのである（図3を参照）。同号の「編輯後記」には、「今月は姜魏堂君の『つぼや盛衰記』を掲げることにした。この戯曲は陶器の製作に關する日鮮關係の事實を取扱つたものであるが、その觀點は民族主義的であり、藝術的にも幼稚な點もあるが、材料の珍しい點で採用することにした」という、編集者・秋田雨雀によるコメントも掲載されていた（図4を参照）。いずれにせよ、敗戦後の市来義道から姜魏堂への「転向」疑惑は、これにて一掃されたと考えて良いだろう。

## IV. むすびにかえて

以上の検討を経た後、わたくしは『南京』の史料的な意味について、ふたたび思いをめぐらせてみた。

「原稿の検閲に多くの時間を割いて下すった関係当局」を意識した時局の障壁については、語る必要はなからう<sup>17)</sup>。むしろ次の一節に、わたくしは『南京』編集者たる「朝鮮人」市来義道の精

一杯の「抵抗」を感じ取った。

「謂はゞ、腐敗せる旧体制内に多くの新興覚醒の気運を交錯せしめてゐる中国社会の中から、例へばその国民性を拾ひあげることすら容易の業ではない。表面に現れたもの、うち、その何れが本質的なものであり、その何れが可変的なものであるかの厳密な判定を要するからであり、況んや現占領地区内に在る中国人の夫れが何の程度まで基準たり得るのかの大きな疑問があるに於てをやである。この意味に於て、収賄癖を中国人の本質的な国民性となす俗説には首を傾げざるを得ない。蔣（介石……引用者）の所謂新生活運動が、牢固として拔難いかの如くに見えてゐた封建時代の遺習に対して投げた現実の影響力を想ふからである<sup>18)</sup>」。

占領そのものの不自然性、あるいは南京国民政府の施策に対する積極的評価など、翻せば日本による中国軍事支配の限界性の表明であり、これは日本人・市来義道ならぬ被抑圧者を自覚する「姜魏堂」の認めた感慨ではないだろうか。無論、編纂過程の短さに起因する史料羅列の体裁は、大いなる限界としながらも、『南京』の没個性的な在り方そのものに、わたくしはなぜかしら惹かれるのである。

\* \* \*

勿論この二次史料は、近年ようやく開始した戦時中国占領地研究の蓄積、及び実証研究を支える一次史料を含む文献と並行して読まれるべきであり、その個別の紹介も解説者の義務であると認識するが、この方面については、アスキュー・ディビッドの解題（本誌に収録）に委ねたい。

また復刻作業に際しては、本文中で記した著作権関係のデータに基づいて京都市中京区壬生の住所を訪問し、また念のために記載された電話番号宛に照会を行い、更に関連団体と思われる幾つかの組織に問い合わせたが、著作権継承者との連絡はとれなかった。「姜魏堂」執筆の「生きている虜囚」が、磯貝治良・黒古一夫編『〈在日〉文学全集』第15巻（勉誠出版、2006年）に再録されていたため、ゆまに書房編集部から勉誠出版の担当者に照会した結果、やはり状況は不明であったという。市来義道、そして「姜魏堂」に関する情報をお持ちの方は、ぜひ筆者あるいは「ゆまに書房編集部」にご連絡をお願い申し上げたい。

いずれにせよ、被造物たる人間は、生死の時間を選択することはできない。同様に、書物もまた生まれ落ちた瞬間から一人歩きを始め、おのれの望む方向に歩むことが保障されてはいない。擱筆にあたり、『南京』が現在、南京大虐殺事件のごく一部の要素を「立証」するためにしか用いられていない現象について、市来義道＝姜魏堂の生涯を覚えると、複雑な心境にならざるを得ないことを、敢えて明記しておく。

註

- 1) 「序」及び「編纂後記」（市来義道編『南京』南京日本商工会議所、1941年9月）、序の4頁、及び本文の686頁。以下、本書からの引用の場合、書名を単に『南京』とだけ略記する。
- 2) 「南京日本商工会議所」（同上『南京』附録（二））1～3頁。
- 3) 姜魏堂『ある帰化朝鮮人の記録』（同成社、1973年）13頁。同書は「南京の章」、「上海の章」から開始する戯曲風の作品であり、登場人物は全て仮名であった。しかし、『南京』所収の記録と対照すれば、回想中に登場する「酒匂会頭」は佐藤貫一、市来を商工会議所に斡旋した慶應義塾の同級生で大陸新報南京支社の「東田」は西島五一、調査部長「小山」は牧山勲と今藤西二の個性を合成させた人物であると解読する事ができる。

- 4) 南京日本商工会議所の刊行物として、以下のものが列挙される。①『経済年報』第1号；②『経済月報』；③『国民政府商工関係法規一，商標法・同施行細則』。しかし、日本国内での所蔵は不備であり，米国議会図書館や中国国内での調査を継続したい。
- 5) 姜魏堂前掲『ある帰化朝鮮人の記録』11～14頁。
- 6) 『南京』の「序」4頁。
- 7) これに関しては，拙稿「中支建設資料整備委員会とその周辺」（『立命館経済学』第49巻第5・6号，2000年）において，翻訳作業の初歩的な一覧表を掲載しておいた。現在は，米国議会図書館などでの調査を通じ，ほぼ完璧な状態に仕上がっているが，未発表であるため，さしあたりこれを参照されたい。
- 8) 『南京』423～439頁。
- 9) 姜魏堂前掲『ある帰化朝鮮人の記録』17頁，及び32頁。
- 10) 「南京日本商工会議所沿革」，『南京』附録（二），2頁。
- 11) 半藤一利「日本国憲法の二〇〇日」（『文藝春秋』，2008年）143頁。この問題は，単に「敗戦」ショックの時代だけではおさまらない普遍性を持っているのだろう。1980年代初めに大学に入学した小生は，数多くの進歩的な文献やマルクス主義の理論を学び，その前衛に立つ頼もしい「団塊の世代」に指導を仰ぎながら，平和と民主主義によって新しく再編された社会を創造する担い手になりたいと，真剣に考えていた。しかし，冷戦体制の終結と東側世界の実質的崩壊後，「進歩の人士」や「左翼的知識人」の多くが，十分な自己批判もせぬままに，突如として新自由主義的な「グローバル化」を推進する側に廻った。結果こんにちの階級社会「日本」の形成が加速し，学問の場においても収益や効率が重視されるに至った十有余年を，教員として生きてきた。特定の個人や法人を指すわけではないが，変革の展望や民主的福祉の社会建設に向けた闘争を自ら激しく提起し，途上であつてなく捨て去り，残余した負債をわたくしたちに押しつける「団塊の世代」の一部に対して，現在では怨念に近い感情を有していることを，敢えて告白しておきたい。
- 12) 「在日作家・詩人総覧」磯貝治良文責。http://homepage1.nifty.com/KGHAYASIYA/sakusaku/2.1.htm
- 13) 「姜義篤君傳」（高橋忠治郎編『帝国議會議員候補者列伝』，庚寅社，1901年）435頁。
- 14) 姜魏堂『生きている虜囚』（新興書房，1966年）74～75頁。
- 15) 姜魏堂「神を畏れぬ人々」（謄写版台本，早稲田大学演劇博物館「千田文庫ル582」，1946年）168頁。
- 16) 姜魏堂『神を畏れぬ人々』（新興書房，1968年）81～176頁に収録されている。
- 17) 『南京』の「序」4頁。
- 18) 『南京』の「序」3頁。

【附記】本稿の作成過程において，京都府立総合図書館，及び早稲田大学坪内博士記念演劇博物館には，資料閲覧でたいへんお世話になった。ここに感謝を申し上げたい。またこの解題はもとも，『近代日中関係史資料叢書4 南京 別冊 南京市政概況』（ゆまに書房，2008年5月）に掲載された内容に，追加と修正を加えたものである。改稿加筆にあたり新たに作成した附表と附図は，立命館大学大学院に在籍する久保友美恵・吉織加緒里・律燁の各氏との議論を通じて得られた成果を用いた。

【補足説明】「姜魏堂」をどう発音するかについては，実は本人も時期により振り仮名を変化させている。①1946年「神を畏れぬ人々」台本では「キャウ・ギダウ」，②1966年『生きている虜囚』では「きょう・ぎどう」，③1973年『ある帰化朝鮮人の記録』では「カン・キダン」と「あとかき」に署名してある。

附表 南京日本商工会議所会員と地域分布状況

住 所	業 種	商 号	「満華職員録」に記載されている企業
石 婆 婆 港	貿 易 商	安宅商會社南京出張所	
中 山 路	貿 易 商	新興公司	
	〃	第一公司南京出張所	
	〃	南里貿易株式會社南京出張所	
	〃	日本物産合資會社南京支店	
	〃	水田漆行南京出張所	
	〃	東方洋行南京支店	
	〃	株式會社八木商店南京出張所	
	食 料 品 業	吉備之舎	
	〃	三福屋	
	旅館・下宿・アパート業	京ビルホテル	
	〃	福昌ホテル	
	〃	⊖旅館	
	洋品・化粧品・呉服商	大陸洋行	
	運 輸 業	齋藤自動車南京支店	
	土木建築請負及材料商	一郡商会南京支店	
	〃	上海復興材料株式会社南京出張所	
	工 廠	晃明洋行	
	〃	中山鋼業廠南京出張所	
	自動車修理並販売業	昭和精油商事株式会社南京出張所	
	売 薬 業	東亞公司南京出張所	
	〃	紫垣大薬房	
	燃料販売業	華北石炭販売株式会社南京受渡事務所	
	銀 行	台湾銀行南京派遣事務所	
	百 貨 店	華中百貨店	
	〃	高島屋南京出張所	
	紙袋製造業	渡邊洋行	
	石油・ガソリン販売業	中華出光興産株式会社南京出張所	
	〃	石油聯合株式会社南京出張所	
	其 他	台湾青果株式会社南京営業所	○
	〃	日米商事株式会社南京出張所	○
	〃	東和劇場	
中 山 東 路	貿 易 商	阿部市洋行南京出張所	
	〃	株式会社丸永商店	
	〃	榮泰洋行南京支店	

中山東路	〃	極東公司	
	〃	中湘號	
	〃	土橋號	
	〃	山本洋行	
	〃	兼松商店南京出張所	
	食料品業	木林洋行	
	〃	櫻井洋行	
	〃	東運公司南京支店	
	〃	本田商店	
	〃	山口商會南京支店	
	〃	梶塚洋行	
	旅館・下宿・アパート業	東方アパート	
	〃	福田館	
	洋品・化粧品・呉服商	大脇商店	
	〃	丸甲洋行	
	運輸業	江南産業公司南京出張所	
	飲食店業	菊一食堂	
	〃	日麵食堂	
	〃	美津屋	
	〃	山吉食堂	
	〃	萬樂	
	〃	新中央酒家	
	土木建築請負及材料商	株式会社福昌公司南京出張所	
	国策会社	華中水電股份有限公司南京支店	○
	〃	華中蚕糸股份有限公司南京支店	
	家庭金物，陶器荒物業	かなものや南京支店	
	〃	日比野洋行南京支店	
	〃	漢和洋行南京支店	
	煙草販売業	東洋葉煙草株式会社南京出張所	
	煉瓦製造業	京華煉瓦廠	
	銀行	漢口銀行南京支店	
	〃	上海銀行南京支店	○
	製菓販売業	雲仙堂	
	〃	銀座堂	
	〃	森永製菓配給所	
	〃	新高	
時計及貴金属商	織田洋行南京支店		

中山東路	〃	森洋行南京支店	
	〃	モトキ時計店	
	書籍・文房具及新聞取次業	至誠堂南京支店	
	〃	文房洋行南京支店	
	清涼飲料水製造業	国榮洋行	
	〃	株式会社大三洋行南京出張所	
	〃	富士サイダー横山商店	○
	タイプライター・謄寫版販売業	日本タイプライター株式会社南京出張所	○
	電気水道工事請負及器具商	双葉電気公司	
	〃	日本電機公司	
	其 他	お茶福	
	〃	池内洋行	
	中山北路	運 輸 業	日本通運株式会社南京営業所
自動車修理並販売業		豊田自動車工業株式会社上海工場南京出張所	
太平路	貿 易 商	伊藤忠商事株式会社南京出張所	○
	〃	岩尾商店南京出張所	
	〃	長谷川棉行南京出張所	
	〃	瀛華洋行南京出張所	
	〃	記洋行	
	〃	江商株式會社南京出張所	
	〃	三星洋行	
	〃	西亞洋行	
	〃	多田洋行	
	〃	天榮洋行南京支店	
	〃	松坂屋南京営業所	
	〃	萬谷洋行南京出張所	
	〃	明昌洋行	
	〃	岡嶋洋行	
	食 品 業	上海購買組合南京支店	
	〃	新保洋行	
	〃	泰山洋行	
	〃	中村商店	
	〃	福大洋行	
	〃	○組	
	旅館・下宿・アパート	廣島旅館	
	〃	昭和園	
	洋品・化粧品・呉服商	白木實業公司	

太 平 路	〃	稲垣呉服店	
	〃	丸井呉服店	
	〃	大石洋行	
	〃	玉圓公司	
	〃	南京百貨店	
	運 輸 業	国際運輸株式会社南京営業所	
	国 策 会 社	華中電気通信股份有限公司南京営業所	○
	家庭金物，陶器荒物業	長崎洋行	
	〃	橋本洋行	
	煙草販売業	瀬川洋行	
	自動車修理並販売業	大江商会	
	買 薬 業	重松薬房南京支店	
	〃	大華薬房	
	百 貨 店	華中百貨店	
	醸 造 業	賓醸造工廠	
	印 刷 業	華中印書局南京支局	
	タイプライター・謄寫版販売業	堀井謄寫堂南京出張所	
	紙袋製造業	丸榮洋行	
	家 具 商	上西洋行	
	其 他	中華全国火柴産銷聯營社南京支社	
	〃	杉浦商店	
	〃	三大公司	
	〃	林楽器店南京支店	
〃	藤幸洋行南京支店		
〃	三亥洋行		
白 下 路	貿 易 商	岡山號	
	〃	太平洋行	
	旅館・下宿・アパート業	肥前館	
	煙草販売業	南京煙草卸業組合	
東 海 路	貿 易 商	齋藤洋行	
	運 輸 業	吉 崎 洋 行	
二 郎 廟	貿 易 商	三益社南京支店	
	〃	上海百興洋行南京支店	
	食 料 品 業	相互社南京支店	
	飲 食 店 業	東 京 庵	
	土木建築請負及材料商	橋本商会	
楊 公 井	貿 易 商	佐藤洋行	

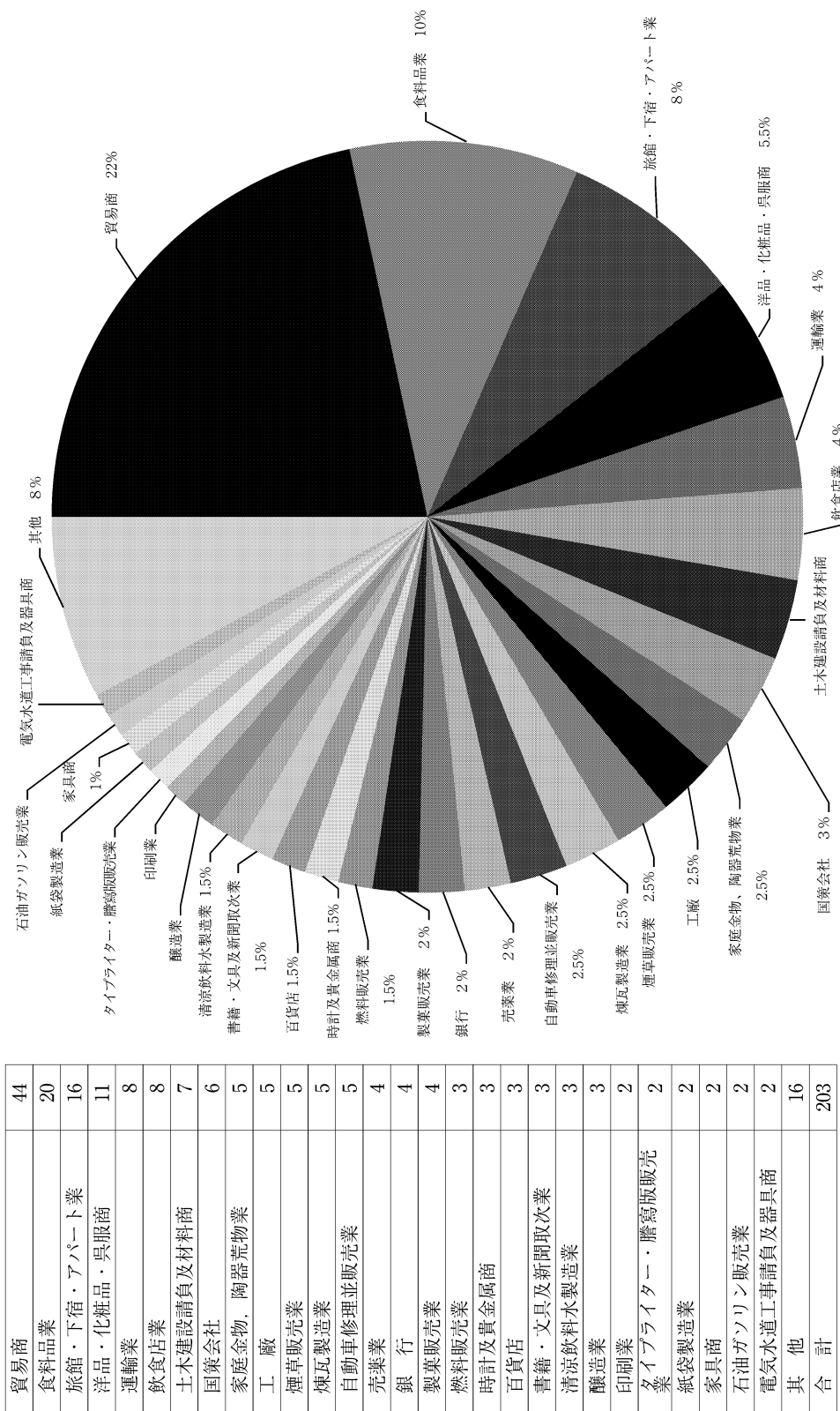


中華路	貿易商	竹村棉花株式会社南京出張所	
莫愁路	貿易商	東洋棉花株式会社南京出張所	
延齡巷	貿易商	徳盛號	
	食料品業	三共商會	
	旅館・下宿・アパート業	賓來館	
碑亭巷	貿易商	中山洋行	
	食料品業	朝日洋行	
	〃	福記洋行	
	旅館・下宿・アパート業	鈴丸旅館	
	運輸業	山田タクシー	
	土木建築請負及材料商	水野組南京支店	
	燃料販売業	徳昌洋行	
	工 廠	青柳洋行	
江蘇路	貿易商	三井物産株式会社南京出張所	
鼓樓車	貿易商	三菱商事株式会社南京出張所	○
	其 他	磐城セメント南京出張所	
復興路	貿易商	吉田洋行南京出張所	
	食料品業	旭洋行	
	銀 行	横浜正金銀行南京出張所	○
朱雀路	貿易商	三河興業株式会社南京支店	
昇州路	貿易商	進南洋行	
遊府西街	旅館・下宿・アパート業	有明館	
	〃	湘一旅社	
	書籍・文具及新聞取次業	富士洋行	
	醸 造 業	と醬油店	
國府西街	旅館・下宿・アパート業	日進館	
北門橋巷	旅館・下宿・アパート業	佐賀屋	
下関商街	旅館・下宿・アパート業	野田屋	
下関賓善街	旅館・下宿・アパート業	楊子ホテル	
下関大馬路	洋品・化粧品・呉服商	三崎洋行	
	買 薬 業	台湾銀行南京派遣員事務所	
下関熱河路	運 輸 業	杉本組	
下関江邊路	〃	東亞海運株式会社南京支店	
	国策会社	上海内河輪船股份有限公司南京支店	
下関三叉河	其 他	有恒麵粉公司	
博厚崗	其 他	日本水産株式会社南京出張所	
洪武路	洋品・化粧品・呉服商	資生堂南京配給所	

維新路	土木建築請負及材料商	大瀧組	
	〃	龍新洋行	
	煙草販売業	共盛煙草株式会社南京支店	
	煉瓦製造業	濱本公司南京出張所	
	印刷業	明和洋行	
	家具商	日照公司南京支店	
赤壁路	国策会社	華中鋁業股份有限公司南京出張所	○
南京驛構内	国策会社	華中鐵道股份有限公司南京支店	○
糖坊橋	工場	南京鉄工所	
鉄管巷	工場	維新鉄工所	
漢府街	煙草販売業	昭和組合南京支店	
	醸造業	九十九洋行	
藩家菜園	煉瓦製造業	義合東	
漢中路	煉瓦製造業	日東號	
銅銀巷	煉瓦製造業	揚子洋行	
	燃料販売業	飯島洋行	
文昌宮	自動車修理並販売業	日産自動車工業株式会社南京出張所	○
湖北路	自動車修理並販売業	中山自動車修理工場	
珠江路	其他	遠東公司	
計203社			計13社

（出典）『南京』附録（二）9～22頁，及び『滿華職員録』1065～1305頁より作成。

附図 南京日本商工会議所会員の業種別百分率



貿易商	44
食料品業	20
旅行・下宿・アパルト業	16
洋品・化粧品・呉服商	11
運輸業	8
飲食店業	8
土木建設請負及材料商	7
国策会社	6
家庭金物、陶器売物業	5
工廠	5
煙草販売業	5
煉瓦製造業	5
自動車修理並販売業	5
売業業	4
銀行	4
製菓販売業	4
燃料販売業	3
時計及貴金屬商	3
百貨店	3
書籍・文具及新聞取次業	3
清涼飲料水製造業	3
醸造業	3
印刷業	2
タイプライター・謄写版販売	2
紙袋製造業	2
家具商	2
石油ガソリン販売業	2
電気水道工事請負及器具商	2
其他	16
合計	203

(出典) 付表より作図した。